

平成30年6月27日現在

機関番号：32661

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463431

研究課題名(和文) 小児がんの子どもをもつ親のレジリエンス促進支援モデルの構築

研究課題名(英文) Building a Nursing Support Model Promoting Resilience in Parents of Children with Cancer

研究代表者

河上 智香 (KAWAKAMI, Chika)

東邦大学・看護学部・准教授

研究者番号：30324784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：我が国における小児がんの5年生存率は80%を超えるようになってきた。しかし、以前として小児がんは小児の死因の上位を占めており、小児がんの子どもをもつ親は強い危機状況に陥ることが知られている。近年、危機的状況からの立ち直りに関する要因として「レジリエンス」が注目を集めている。レジリエンスは不運な出来事に対して、自らの力によって克服し、その状況に適応するまで回復しようとする力であり、個人と環境間での相互作用によって促進することが可能である。本研究では小児がんの子どもをもつ親の心理的側面に焦点を当て、レジリエンス促進に向けた看護支援モデル構築に向けた指針を得ることを目的として行われた。

研究成果の概要(英文)：The 5-year survival rate for children with cancer in Japan is now more than 80%. However, cancer continues to be one of the top causes of mortality among children and is known to cause severe mental health crises in parents. This study aimed to find guiding principles that could be used to build a nursing support model to promote resilience among parents of children with cancer by focusing on aspects of their mental health. Resilience refers to an individual's ability to surmount adverse events by "bouncing back" and adapting to the situation. This ability can be promoted through interactions between individuals and their environment and has, therefore, recently attracted much academic interest as a factor in crisis recovery.

研究分野：小児看護学

キーワード：レジリエンス 小児がん 親 インタビュー

### 1. 研究開始当初の背景

医療の進歩によって小児がんの治癒率は高まったが、治療による影響が生涯続くことも明らかになってきた。小児がんの発生要因は不明だが、家族にとっては後天性かつ永続する疾患のため、診断によって家族は強い衝撃を受け、危機状況に陥って苦悩する。しかし小児がんの適切な治療の進行には、家族の協力が必須であり、ショックからの心理的な適応を促すための医療者からの早期からのサポートが非常に重要である。

強大なストレスによって危機状況に陥った際の、危機からの立ち直りには個人差がみられ、個人のストレスからの立ち直りに関する要因として、近年「レジリエンス」が注目を集めている。「レジリエンス」は心理学のコーピングと、ストレスがもつ生理学上の側面を背景とした概念であり(図1)、逆境や強いストレスからのこころの回復を意味する。不運な出来事に遭遇し、危機状況におかれても、自らの力によって克服し、元の状況に適応するまで回復しようとする力であり、周囲からのサポートを活用することによって、個人が内面に有する力を高め、回復を助ける可能性があることが示唆されている。

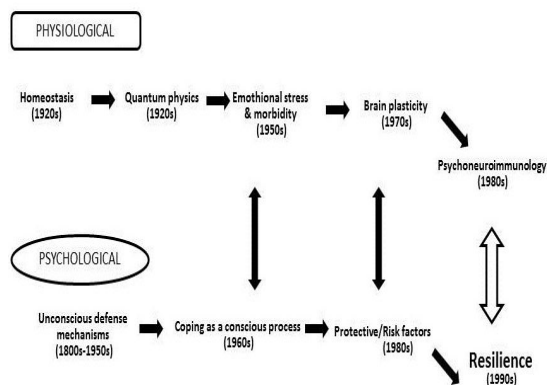


図1 レジリエンス構造の発展  
(Kathleen Tussie 他, 2004)

小児がんの発症数は年間約2,500例であり、医療の進歩により約80%が治癒できるようになっている。しかし子どもの死亡原因となる疾患の上位を占めており、小児がん患児の親は非常に強い危機状況に陥ることが知られている。小児がんは全国200施設以上の治療施設があるが、希少なうえに成人がんとは種類が異なるがんのため、臨床からの高度な専門知識の発信と治療方針の標準化へのニーズが高く、平成25年「小児がん拠点病院」が全国7ブロック・15施設が厚労省によって選定された。さらに治療後の身体的・心理的・社会的な晩期合併症の出現と治療との因果関係が明らかになってきており、生涯にわたるフォローアップを必要とする疾患であ

るが、子どもや家族に対する人的・物的な治療環境がまだ十分に整備されていない。さらに小児がんに関する研究において、症状管理や他職種連携は取り組まれているが、親の心理的側面に焦点をあてた研究までは踏み込めておらず、数少ないのが現状である。

本研究は小児がんの子どもを抱える親のレジリエンス促進支援モデルを構築し、小児がんの子どもをもつ親を支援する実践的示唆を得るとともに、小児看護のケア向上に資するための介入研究への一助を得ることを目的とする。

### 2. 研究の目的

- 1) 欧米で開発されているレジリエンス強化プログラムの理論と実践状況について、情報を収集し、我が国における実用化の可能性を検討すること
- 2) 小児がんの子どもをもつ親を対象として、インタビューの実施と尺度によるレジリエンスの測定により、レジリエンスの高い親に特徴的な環境要因や個人の対処経験(認知的問題解決方略)の具体的なあり方を明らかにし、親のレジリエンスを高める要因を分析すること。
- 3) 1), 2)より、レジリエンス促進に向けた看護支援モデルを構築に向けた指針を得ること

### 3. 研究の方法

1) 文献レビュー: レジリエンスに関する文献を収集し、これまでに代表研究者が行ってきた研究において既にレビューした文献に加えて、研究代表者および研究分担者とともに内容を検討し、最新の知見や動向の整理を行う。また欧米で試みられているレジリエンスに関する実践プログラムに関する情報を海外の研究者から学会などで情報収集をする。

2) インタビュー調査の準備: 小児がんおよび後天性疾患の子どもと親に関連した文献を収集し、研究代表者および研究分担者とともに内容を検討し、看護援助の状況について整理する。研究代表者と研究分担者が、欧米の支援プログラムの実施状況を視察し、内容とその成果について情報を収集する。

3) インタビュー調査の実施: 当該機関の倫理委員会の承認が得られた後、小児がんの子どもをもつ親の闘病過程についてインタビューを実施する。インタビューは、研究協力者の協力を得て、入院中の小児がんの子どもを持つ親、外来通院中の小児がんの子どもを持つ親を対象として、各

- 10名～20名程度で飽和状態になるまでとする。得られたインタビューデータは質的に分析する。
- 4) インタビュー時に客観的指標を得るために尺度を用いてレジリエンスの測定を行う。
- 5) 研究代表者、研究分担者は、小児がんの子どもをもつ親のレジリエンス支援モデル構築に向けた具体的検討を行う。
4. 研究成果
- 1) 健康障害を持つ子どもと親のレジリエンスに関連する文献を研究協力者の協力を得て収集し、研究代表者および研究分担者とともに内容を検討した。文献は小児がんだけでなく他疾患も併せて収集し、小児がん患児とその親のレジリエンスの構成要因を整理した。文献からレジリエンスを促進する看護援助の状況を検討し、国内外での学会などで得られた知見とあわせてインタビューガイドを作成した。
- 2) インタビュー技法の習得に向けたセミナーなどへ参加し、インタビュワー間の質の均一化を図る。
- 3) 欧米での実践プログラム実施状況を視察する予定であったが、海外情勢を鑑みて一旦留保となったため、研究計画遂行の見直しを行った。小児がん患児をもつ親の会メンバーと意見交換を行い、インタビューガイドの再検討とプレリサーチインタビューを行なった。
- 4) 研究メンバーでインタビュー時に使用する評価尺度を選定した。
- 5) 研究代表者は、一般社団法人日本ポジティブ教育協会によるレジリエンス教育プログラムを受講し、レジリエンス・トレーナーとしての協会認定を受けた。また分析を担当する研究代表者、研究分担者は質的分析の講習会を受講し、質的データを科学的に分析する手法の獲得に努めた。
- 6) アイルランドのダブリンにある Our Lad's Children's Hospital Crumlin (OLCHC) にて研修を受けた。研修は、小児がん医療、小児がん看護、小児がん教育で構成され、幅広い年代の小児がん患児や親へのケア実践に向けた新たな知見を得られた。
- 7) 小児がん患児をもつ親や小児がん患児を支える多職種と意見交換会をもち、インタビュー内容の枠組みを検討した。
- 8) 得られた研究成果は適宜発表や公開を行った。
5. 主な発表論文等
- 〔雑誌論文〕(計 3 件)
- 1) 小川純子、伊藤奈津子、河上智香、竹之内直子、田村恵美、小原美江、鈴木恵理子 (2018): 入院中の小児がん患児に対する健康教育・身体活動介入に関する実態調査 淑徳大学看護栄養学部紀要 10, 19-29 査読有。
- 2) 野中 淳子、小川 純子、河上 智香、井上 富美子 アイルランドにおける小児がん看護に関する研修報告 Pediatric Nursing Study Tour (2017) 小児がん看護 12 (1), 55-65 査読有。
- 3) 出野慶子、河上智香、天野里奈、中村伸枝 (2014) 1型糖尿病をもつ年少の子どもを養育する父親の役割 日本糖尿病教育・看護学会誌 18(1), 33-39 査読有。
- 〔学会発表〕(計 11 件)
- 1) 天野里奈、河上智香、出野慶子、小川純子、石川福江、井上雅美、大橋一友 (2018) 健康障害をもつ子ども(発達障害児)と家族のレジリエンスに関する文献検討 第65回日本小児保健協会学術集会
- 2) 河上智香、出野慶子、天野里奈、小川純子、石川福江、井上雅美、大橋一友 (2018), 健康障害をもつ子ども(重症心身障害児)と家族のレジリエンスに関する文献検討 第65回日本小児保健協会学術集会
- 3) 河上智香、出野慶子、高山充、天野里奈、中村伸枝、金丸友 (2017) 1型糖尿病をもつ小学生が抱える病気への思いと発達課題に応じた援助の探求。第22回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
- 4) 出野慶子、高山充、河上智香、天野里奈、中村伸枝、金丸友 (2017) インスリンポンプを使用している子どもの学校生活状況。第22回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
- 5) 小川純子、伊藤奈津子、河上智香、竹之内直子、田村恵美、小原美江、鈴木恵理子 (2016) 入院中の小児がん患者に対する健康教育・身体活動介入に関する実態調査 第14回日本小児がん看護学会学術集会
- 6) 出野慶子、高山充、河上智香、天野里奈、中村伸枝、金丸友 (2016) 母親がとらえているインスリンポンプを使用している子

子どもの学校生活と学校側の対応 第 21  
回日本糖尿病教育・看護学会学術集会

- 7 ) Junko Ogawa, Natsuko Ito, Chika Kawakami, Naoko Takenouchi, Megumi Tamura, Yoshie Ohara, Eriko Suzuki (2016) The State of Health Education and Physical Activity (PA) During Treatment of Child Cancer. the 48th Congress of the International Society of Paediatric Oncology. Dublin, Ireland
- 8 ) 小川純子, 伊藤奈津子, 鈴木恵理子, 河上智香, 沖本由理, 井上富美子(2015) 小児がん経験者の健康観・健康行動の特徴 第 13 回日本小児がん看護学会学術集会
- 9 ) Junko Ogawa, Natsuko Ito, Fumiko Inoue, Eriko Suzuki, Chika kawakami(2015) Health Behaviors of Childhood Cancer Survivors(CCSs) in Young Adults. the 47th Congress of the International Society of Paediatric Oncology. Cape Town, South Africa
- 10) 出野慶子, 河上智香, 天野里奈, 中村伸枝(2014)協働して1型糖尿病をもつ子どもを育てている夫婦の思い 第 19 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
- 11) Chika Kawakami, Keiko Ideno, Junko Ogawa, Rina Amano, Kana Harada, Noriko Morita, and Fukue Ishikawa(2014) Emotional experiences of parents caring for their children with cancer the 46<sup>th</sup> Congress of the International Society of Paediatric Oncology Toronto

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

河上 智香 (KAWAKAMI, Chika)  
東邦大学・看護学部・准教授  
研究者番号：30324787

(2)研究分担者

出野 慶子 (IDENO, Keiko)  
東邦大学・看護学部・教授  
研究者番号：70248863

小川 純子 (OGAWA, Junko)  
淑徳大学・看護栄養学部・准教授  
研究者番号：30344972

天野 里奈 (AMANO, Rina)  
東邦大学・看護学部・助教  
研究者番号：90459818

井上 雅美 (INOUE, Masami)  
地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪  
母子医療センター(研究所)・その他部局  
等・血液・腫瘍科・主任部長  
研究者番号：30565354

高山 充 (TAKAYAMA, Mitsuru)  
東邦大学・看護学部・助教  
研究者番号：20623424

(3)連携研究者

なし